

第2章 NISE自閉症教育実践セミナー

第2章 NISE自閉症教育実践セミナー

1. セミナー開催の趣旨について

1) 趣 旨

本プロジェクト研究の研究成果（「自閉症教育実践ガイドブック－今の充実と明日への展望－」（2004年）、「自閉症教育実践ケースブック－より確かな指導の追究－」（2005年））の普及を図り、自閉症のある子どもの教育の充実・発展に寄与するとともに、本研究に関する課題を整理し、解決の方向性を見出すことを目的に、「NISE自閉症教育実践セミナー」を行う。

全国を3ブロックに分け、北海道（10/14/15）、大阪（10/21）、福岡（11/12）の3会場で開催した。3会場では独自のシンポジウムや分科会を企画した（3会場の日程、プログラムの詳細は後述）。3会場の概要は以下のとおりである。

2) 主 催 独立行政法人国立特殊教育総合研究所

（北海道会場）北海道教育大学附属養護学校（本プロジェクト研究協力校）

（大阪会場）大阪府立大阪府教育センター

（福岡会場）国立大学法人福岡教育大学障害児教育講座・附属障害児治療教育センター（本プロジェクト研究パートナー）

3) 対象者 主として知的障害養護学校等で自閉症のある幼児児童生徒の指導にあたっている教職員

4) 定 員 200名

2. プロジェクト研究ワークショップについて

1) 趣旨

「NISE自閉症教育実践セミナー」では、各地域の実践校や地域の専門機関からの報告に加え、参加者それぞれの実践の現状と課題についてグループで共有し、解決策を提案する「プロジェクト研究ワークショップ」を設けた。

＜概要＞ 知的障害養護学校における自閉症教育の現状と課題について、参加者それぞれの学校での取組を共有した上で、解決策を導き出すことを目的とする。

＜方法＞ ワークショップ形式（ブレインライティング法、グループの構成員は4～6名）で行う。

＜課題について＞

以下のように、三つの課題を提案した。

① 自閉症教育充実のための教育活動全般でのアセスメントの在り方

●自閉症教育充実のための教育活動全般でのアセスメントの在り方

自閉症教育の充実のために、教育活動全般でのアセスメントをどのように行うかを考えたいと思います。アセスメントとは、入学時や年度当初に行う心理検査や行動観察が代表的なものであり、このアセスメントを材料に、保護者との連携等を行って、子どもたち一人一人のプロフィールを作成して保護者や関係機関の支援者と協議することが期待されています。また、時期を問わず、子どもたちの変化に合わせて適宜アセスメントを行うことも期待されていると言えるでしょう。

自閉症教育の充実に資する、教育活動全般でのアセスメントの在り方について、現状と課題を共有し、その解決策を提言してください。

② 自閉症教育充実のための教育内容の整理のための観点の在り方

●自閉症教育充実のための教育内容の整理の観点の在り方

自閉症教育充実のために、自閉症の特性に応じた教育内容の整理の観点の在り方を明らかにしたいと思います。

各教科等の具体的な内容表を作成したり、自立に向けて必要な内容をいくつかの観点により整理して一貫性と継続性をねらった教育内容の創造を図ったりするなど、一人一人のニーズに応じた教育内容の方向性や系統性を確認するためのツールとして、「観点」を定め、共通理解をすすめる学校が増えてきました。

知的障害を併せ有する自閉症のある子どもたちの教育内容のより所として、盲・聾・養護学校の学習指導要領があります。また、知的障害に対応した各教科等の内容も示されています。しかし、自閉症のある子どもたちの教育内容の整理にあたっては、その障害特性に応じた新たな「観点」の提示が必要ではないかとも考えられます。

自閉症教育の充実に資する、自閉症の特性に応じた教育内容の整理の観点の在り方について、現状と課題を共有し、その解決策を提言してください。

③ 自閉症教育充実のための自閉症の特性に応じた教育課程の編成

●自閉症教育充実のための自閉症の特性に応じた教育課程の編成

自閉症教育充実のために、自閉症の特性に応じた教育課程の編成の在り方を明らかにしたいと思います。

既存の知的障害教育の内容や方法だけでは十分でない理由として、対人関係や過敏性の問題など、自閉症の特性が考えられます。そのため自閉症の特性に応じた授業や教育課程を新しい発想で開発していくことが必要だと考えています。

はじめに、自閉症の特性に応じた教育課程の編成に取り組むにあたって、教育内容の抽出（自閉症教育のポイント）を行う必要があると考え、学習体勢、自己管理能力、指示に応じる、表出性のコミュニケーション、模倣ができる、等の仮説を立てました。

次に指導の形態として、「個人別の課題学習」や「自律生活」、「各教科」、「自立活動の時間における指導（自立活動B）」という枠で、自閉症の特性に応じて抽出した教育内容に取り組む試みをしています。

自閉症教育の充実に資する、自閉症の特性に応じた教育課程の編成の在り方について、現状と課題を共有し、解決策を提言してください。

3. ワークショップの流れ

ワークショップをとおして、三つの課題に対する解決案の作成、発表・質疑を行った。最後に各グループから解決案についてのまとめを提出してもらい、参加者で共有した。福岡会場を例に次頁で紹介する。

プロジェクトワークショップ『知的障害養護学校における自閉症教育の現状と課題』（福岡会場）

司会：齊藤 記録：小澤

グループ担当：①②齊藤、③木村

長期研修員：①岩淵、伊勢田、②土田、③-1丸山、③-2橘

1. 概要 知的障害養護学校における自閉症教育の現状と課題について、参加者それぞれの学校での取組を共有した上で、解決策を導き出すことを目的とします。

2. 方法 ワークショップ形式で行います。

3. 課題について

自閉症教育充実のための

- ① 教育活動全般でのアセスメントの在り方
- ② 教育内容の整理のための観点の在り方
- ③-1 自閉症の特性に応じた教育課程の編成
- ③-2 自閉症の特性に応じた教育課程の編成

4. 日程 11月12日（土）13:30-17:00

順番	内容	所要時間	準備物	参加者
①	趣旨説明	5分	・日程資料	趣旨に関する説明を聴きます。
②	問題提起	10分	・問題提起資料	上記①～③についての問題提起を聴きます。
③	チーム作り	5分	・timetimer	協議したい上記①～③の課題別に、4グループ（③は2つ）に分かれます。
アイスブレイク 1				名前と共通の趣味調べ
④	カード作り	20分	・A6用紙 ・黒マジックペン ・メモ用紙	上記①～③の課題に沿った三つの具体案を、各自で作成（カード作成）します。その際、できる限り「現状・課題・解決策」を整理して書きます。 現状：各自、各校の取り組み。課題：その際に明らかになったこと。解決策：実際に行われた、または考えられる解決策
アイスブレイク 2				ニックネーム
⑤	互いのカードの読み取り・分かち合い	30分	・ホワイトボード ・模造紙 ・セロテープ、のり ・8色マジックペン	グループ内で、自分の書いたカードを説明し合い、メンバーの意見の分かち合いを行います。 *その際、模造紙やホワイトボードを使って作業を進めてください。
⑥	協議	60分		カードを整理しながら、解決策を協議します。 以下のように協議をすすめてください。 ・司会（ファシリテーター）、書記を決めてください。 ・書記は発表者を兼ねてください。
⑦	解決案の作成	20分	・発表用メモ白紙	カードを整理しながら、A4用紙に解決策を作成していきます。
⑧	休憩・発表準備	適宜		各班で上記⑤～⑦の時間に、休憩を取ってください。
⑨	発表・質疑	40分		各グループの解決策案を発表し、質疑、振り返りを行います。（1グループ10分）
⑩	振り返り・まとめ	20分		各グループで、解決策の振り返りを行います。

4. プロジェクトワークショップの結果の概要

ここでは、3会場で行われたプロジェクトワークショップの結果を、三つの課題（テーマ）にそってグループ討議し、その内容をビデオテープからまとめたものとした。ただし、3会場とも「総合的なアセスメントの構築」と「目標設定のための観点」については1グループで、「自閉症の特性に応じた教育課程の編成」は2グループで実施している。

1) 「総合的なアセスメントの構築」について

(1) 北海道会場

- ・まずアセスメントについて次の共通理解を図った。すなわち、今できることや次へのステップ、やり方を変えたらできそうなこと、子どものプロフィール（得意なこと、苦手なこと）、教員のかかわり方の指針（特性から支援の方針を導き出すもの）である。改善のための手だてとして次の3点がある。
 - ① 校内の体制作りである。内容としては、アセスメントの研修、検査器具の整備、検査時間の確保、教員のモチベーションの向上、ケース会議（アセスメントの結果がどう生きたか）など考えられる。
 - ② 専門家や他機関との連携である。教員の検査経験の不足、保護者が納得する専門家、教員の多忙などの課題から、コーディネーターの活用や作業の分業や外注といったことが考えられる。
 - ③ 保護者との連携である。すなわち、手だての工夫でできることの確認、保護者との子ども像の一致を図ること等であり、授業場面に同席してもらったり、ビデオを活用した連携など考えられる。
- ・最後に、校内体制としての課題を確認し、アセスメントはどうしても教師にゆだねられる部分が大きく、人により異なることが指摘される。本来であれば必要な時期に必要な検査を全ての児童生徒に対して行うことが必要であり、そのため、アセスメントをコーディネートできる人がいるとよい。

(2) 大阪会場

- ・アセスメントのグループでは、アセスメントに関する課題の系列として、「風土系」、「力量系」、「共有系」、「システム系」として分類した。
- ・自閉症の児童生徒の個々の支援にアセスメントを生かすためには、一番問題となるのが「風土系」であり、学校風土には、アセスメントが必要だという考え方が育っていない現状がある。さらに、アセスメントの結果が授業や日常生活に上手く生かせない現状がある。
- ・そのため、学校風土を改善するためにはどうしたら良いかを考えた結果、システムや力量、共有の3方向からアプローチしていくことが重要であり、特に学校職員の共有系が重要である。従来使用しているアセスメントや支援計画を公開し、色々な場で協働していく必要があり、そうすることで教師の力量も高まると考えられる。
- ・しかし、自然発生的に力量を高めるのは困難であるため、計画的にアセスメントに関する研修や人材養成を学校全体のシステムとして位置づけ、研修システムの改善を踏まえて学校風土を改善する必要がある。
- ・今回の協議では、具体レベルで自閉症のアセスメントまで到達していないが、情報を共有するこ

とは実際の自閉症の支援につながるのではないか（例として、自閉症の児童生徒は、家庭と学校での違いや変化が大きいので、版化レベルの指導計画を考える上でも、家庭と学校の情報を共有することは重要）。

- ・風土系（学校風土）では、知的障害教育に関して積み上げた教育システムが十分機能しているが、自閉症の児童生徒が存在することで、逆に教育システムの壁が明らかになっている。

（3）福岡会場

- ・自閉症児個々の障害特性を共通理解する必要がある
- ・引き継ぎのためのアセスメントとして、幼→小共通の評価シートが必要、高卒後→移行支援計画の充実が必要である。
- ・集団編成の際には、見通しの持ちやすさや持ち方、人とのかかわりの様子、コミュニケーションの方法の三つを考慮する必要がある。
- ・行動問題に対するアセスメントが必要であり、行動問題も含めた共通理解ツールでは、見通し図やチェック表を作っていくとよい。
- ・場の設定では、セッション、ミーティング、ケース会議が行われる必要があり、小学校1年生段階からPEP-Rを活用するなどして、本人参加も含めて実施してはどうかと考えた。できれば、毎年、せめて、小4年、中1年、高1年で保護者、本人参加で行ってはどうかと考えた。
- ・状態に応じて適宜実施できるアセスメントが必要だろう。
- ・個別の指導計画も一期制にして、最初に作ったものを手直し、追加していくようにしていくとよいのではないか。
- ・アセスメント実施者を育てる夏期集中研修などを行っていったらよい。

2)「目標設定のための観点」について

（1）北海道会場

- ・観点設定の現状は、教師個人による観点により目標設定がされていることが多い。
- ・その理由として、共有するための話し合う時間がないこと、その必要性を感じていないこと、何を本に観点を決めたらよいのか分からないことが挙げられる。
- ・その解決策として2点挙げられた。1点目は、自閉症の特性にあった観点を設定すること、2点目は自閉症の発達にあった観点を設定することが挙げられる。
- ・1点目については、教育内容に関する観点の設定以外に、コミュニケーションや社会性の観点から児童生徒を捉えた上で、正確に作業に取り組める、好きなことにはねばり強く取り組めるなどの、その人の良さを活かす枠組みをつくって目標を設定していくことの必要性を話し合った。
- ・2点目については、発達について正確に把握するために発達検査を行い、その下位項目から、その児童生徒の次の目標を設定していくことで妥当性がでるのではないかと話し合った。
- ・また目標を設定するために、教師や保護者、児童生徒にとって分かりやすい目標にすることで見通しを持って取り組んでいくことができると話し合った。

（2）大阪会場

- ・このグループでは、まず5人が現状の問題点を書き出し、それを整理し「自閉症の共通理解」、「スキル獲得の観点」、「ニーズに応じた目標設定」、「移行に向けて」、「行事の在り方」の5つに

カテゴライズされた。

- ・協議する中では、「自閉症の共通理解」について教員が共通理解できていないとそれ以外の観点を検討するのは難しいという結論となり、「自閉症の共通理解」をどうしていくのかについて協議を深めていった。方法として、それぞれの学校情報をベースにして解決策を検討した。
- ・各学校で問題になっているのは、「知的障害教育の観点から自閉症の観点はあるのか？」であり、観点を考える際にどんなカテゴリーが必要か。
- ・DSM-ⅣやICD-10の柱を観点に考えられるが、それらは分類上の問題であって学校現場にそぐわない。現場では、教育に必要な観点があるのではないか。教育ベースで考えていくと、『IEPベースで進める場合』と『学校が既に作成している観点』の両方が想定され、それぞれのメリットとデメリットを検討した。
- ・『IEPベースで進める場合』のメリットは、「ニーズがしっかりつかめる」、「保護者と共通理解が図れる」であり、デメリットは「学校側の自閉症の捉え方の問題」、「理解度」、「力量の問題」から観点をつかみきれないことが考えられる。
- ・『学校が既に作成している観点』でのメリットは、「あらかじめ整理されているので子どもを総括的にみていくことができる」であり、デメリットは「逆に保護者への押しつけになる可能性がある」であった。
- ・さらに、自閉症の児童生徒への指導観点を考えた場合、トップダウンとボトムアップがあり、トップダウンの場合は「高等部卒後の移行から想定する」であり、ボトムアップは「各自の認知レベルが観点として考えられる」であった。
- ・総合的に協議結果をまとめると、自閉症の児童生徒ばかりではないが、一人一人の指導の観点はオーダーメイドであって、障害別に違いは無いのではないか。自閉症の児童の観点は必要(必須)であるが、その中味を作っていくのは今後であると思われる。

(3) 福岡会場

- ・自閉症の特性をふまえた教育内容の整理の観点が必要。
- ・今までは、教師の主観から子どもをみていたため、人によってズレが出る。その結果、みんな同じに対応しようとしたり、過去の繰り返しをしたりすることが多かった。
- ・知的障害の子どもたちと同じ対応をしようとした。
- ・このことの反省から、子どもの特性から出発した観点を持とうと考え、特性に応じた観点作りを実施しようと考えた。
- ・子どもたちには困り感があり、生きやすさ、安心感を観点のベースに考えたい。そして、人(自分、他人)とのかかわりをもとに認知やコミュニケーションを考え、これら全体を観点のベースにしたい。
- ・観点をベースにすると、今行われている教育活動を見直すことができるのではないかと考えている。そして自閉症の特性に応じた教育課程が編成できるのではないかと考えている。

3)「自閉症の特性に応じた教育課程の編成」について

(1) 北海道会場①

- ・自閉症の特性、育てたい力(教育目標)を考え、そのためにできることを考えた。
- ・まず特性について、3つ組の特性、過敏性などの感覚的特性、シングルフォーカスなどの認知特

性などあることを押さえた。

- ・また育てたい力として、「自発的にコミュニケーションできる力（本人の発信，周囲の受信）」、「見通しを持てる力（スケジュールなど）」、「余暇を過ごせる力（選択・実行できる）」、「セルフコントロールできる力（例えば，やりたいこととすることをマッチングなど）」、「模倣できる力」，「社会性」，「セルフエスティーム（自己有用感）」，「般化する力」を捉えた。
- ・これに基づき現状を分析し，現状の中で対応できること，現状をはみ出してやっていけないことと分けて考えた。
- ・現状では，つけたい力を教科の時間に個別的に行う，生活単元学習（合わせた指導）のなかで行う，時間枠をもうけて指導，個別化すべきことは個別学習で指導，小集団学習，自立活動，典型的に教育課程を編成して実施するなどの取組がある。
- ・これらを押さえ，解決策として，次の4点を話し合った。
- ・1点目は，「指導の内容を再編成して直接的にしどうしていく」こと。例えば，くらし・しごと・よかでの再編成など。2点目は，「自立活動を中心とした教育課程」をおくこと。これは自閉症の特性に応じた自立活動ということであり，5区分22項目で十分か，社会性を加えた6区分等の検討も必要であろう。3点目は，「合わせた指導の中でより個別化していく」こと。合わせた指導にとらわれず子どもに応じた時間枠を新設していくこと。4点目は，「生活単元学習の枠の中で特性に応じた指導をしていく」こと。
- ・以上4点の解決案が出たが，これに伴い「観点」の議論もあった。すなわち，地域で生きる力，社会で生きる力，働く力などをどこで検証していくかという議論。
- ・これについては，ライフステージに応じた内容の整理（スキル習得の段階から般化の段階へ），個別の指導計画と教育課程との整合性（学校教育の中でどう実現していくか），自閉症の特性に合わせた教科の在り方（余暇を充実させるための教科の在り方等）についての視点があった。

（板書内容）

1. 特性（考慮が必要） ・ 3つ組の特性 ・ 感覚過敏性等 2. 育てたい力（指導内容） ・ 自発的にコミュニケーション出来る力 ・ 見通しを持てる力をつける ・ 余暇を過ごせる力 ・ 選択できる力 ・ セルフコントロールできる力 ・ マッチングできる力 ・ 社会性 ・ 模倣できる力 ・ セルフエスティーム ・ 般化	現状 ・ 教科時間の確保→個別的に取り出す ・ ④生活単元学習の中で ・ 時間枠を設けて指導 ・ 個別化すべき事は「個別学習」（般化・集団化） ・ 自立活動として特設 ・ 合わせた教科 ・ 典型的に編成 ・ 子供によって ⇐ では解決するためには ①内容を再編成し直接的に指導する ②自立活動を中心におく（自閉症特性に応じて） →5区分22項目で良いのか？ ③子供に応じた指導枠を特設する 合わせた指導の中でより個別化する→般化学習 ライフステージに応じた指導内容の整理 個別の指導計画の子供の実態を正確に残す方法
--	---

(1) 北海道会場②

- ・ 2点の問題点を考えた。1点目は、自閉症についての様々な取組を教育課程上どこに位置づけていくべきか、自立活動を明確にする必要があることである。例えば、ある高等養護学校では多くの内容を合わせた指導で行っている。その解決策として、時間における自立活動の指導が必要である。すなわち、課題学習を行う上で、その子どもに合わせた課題を解決していくためには自立活動の中で行う必要がある。自閉症の児童生徒の場合、知的障害と学びのスタイルが異なり、1対1の学習体制から小集団、家庭、地域へというつながりの中で学びを捉えることが必要である。こうすることで効率的に学ぶことができ、般化しやすく、応用しやすいということにつながっていくのではないか。
- ・ 2点目は、課題学習（ことば、かず、係活動、図画工作、音楽など）には自立活動以外の内容も多く含まれており、こうした内容を、どのように教育課程に位置づけていくかということがある。合わせた指導として考えていくこともできるが、新たな領域として整理していくことの方が解決するのではないだろうか。どういった領域が必要かは、議論が不足していた。今後の課題である。

(板書内容)

<問題1>

自立活動(MR 養護における)の位置づけが曖昧

明確化する必要あり

<解決策>

- ・ 時間における自立活動の指導が必要である

Ex. 課題学習(その子供に合わせた課題)

<問題2> 自立活動以外の内容も含まれる

ex. 国・算、係活動、図画工作、音楽、体育

新たな領域が必要

自閉症の子の学びのスタイルから

1対1学習体制から小集団、家庭や地域へ

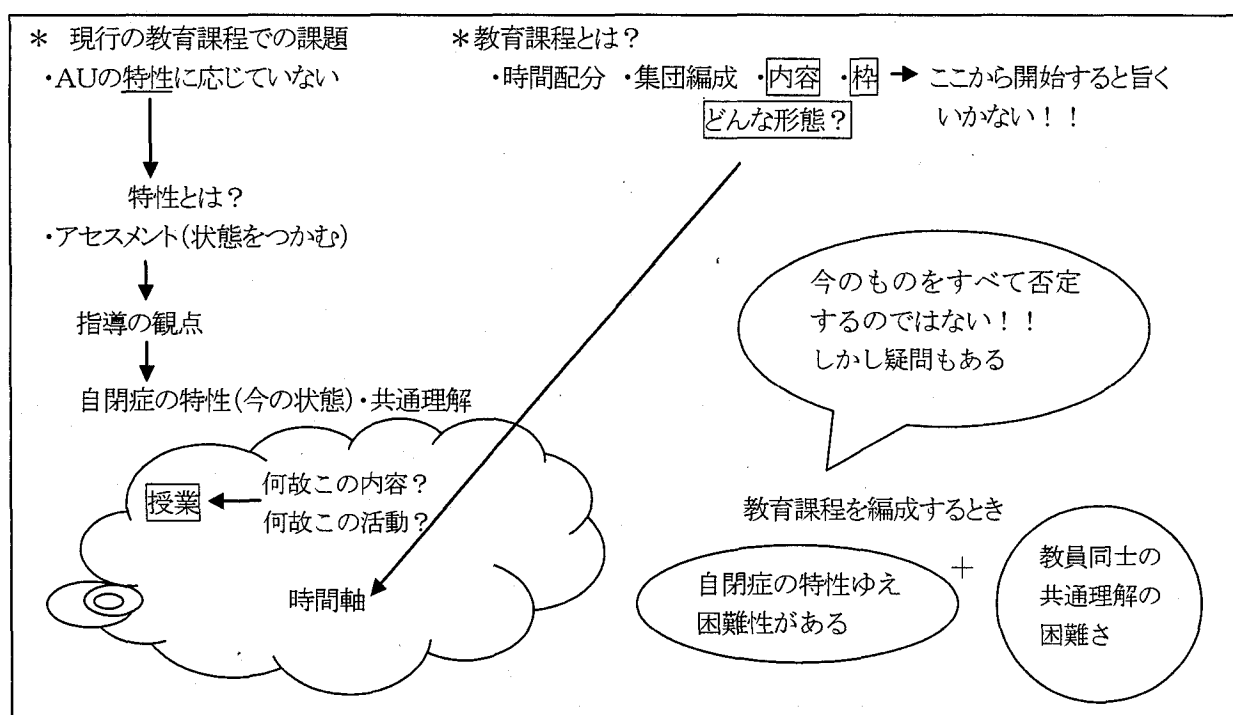
(2) 大阪会場①

- ・ 7人のメンバー各自が発表した内容を課題としてまとめると、「自閉症の特性に応じた指導では集団活動に問題が生じている」という点と、「個別の指導の在り方が課題」という2点が整理された。
- ・ ここでは時間の関係上集団活動を中心に協議をするが、自閉症の子どもの障害に配慮する必要においては、体育や音楽、美術や生活単元といった教科では、見通しが持ちにくいために集団参加が困難であると言える。そのため、パニックや飛び出し等の問題行動が多くなり、知的障害の子どもとは異なった指導が必要ではないか。
- ・ 現状では、知的障害の教育課程の枠に自閉症を当てはめて指導や配慮を工夫しているレベルだ

が、やはり工夫のレベルだけでは解決が難しい状況になっている。したがって、自閉症の特性に応じた教育課程の編成が必要であろう。

- ・そのための課題としては、人とのかかわりやルール理解といった社会性の学び方が重要で、個別指導も必要だが、やはり社会で生きていくことを考えると集団は必要である。
- ・取り出しといった個別指導は必要だが、分けた指導のみでいいかということそうでもないとの意見が出て、「特性に応じた集団での指導」と「取り出しの個別指導」の両方が必要であるとの結論であった。
- ・自閉症の卒業後の社会的自立を考えた場合、現状では自閉症に配慮された場は少なく、そのため、自閉症の自立の仕方や地域家庭での過ごし方を知る必要がある。
- ・様々な課題の中で、自閉症の特性に応じた教育内容は何か。何を目標にどんな指導をしていけばいいのか結論は出ず、考えていく時期にきているとのことで協議が終了した。

(板書内容)



(2) 大阪会場②

- ・現状では、自閉症の子ども個々の特性に応じた配慮は実施しているが、自閉症に適した授業ではない。このような話から協議が開始され、現在の教育課程を否定するのではなく、今あるものを適切なものに変えていきたい。そのために、教員同士の共通理解を図るために研修を行い、話し合いや協議を実施すべきであろう。したがって、枠から考えると難しいので、指導内容を求めながら考えていった。
- ・重要なことは、自閉症の特性を共通理解した上で授業をすべきであるとの認識である。指導内容の話をしていく際に、どうしても子どもの個にかかる内的な話に陥りやすいが、時期的なタイミング、その子の年齢といった時間軸を考慮していくことが大切である。
- ・知的障害の教育課程だけでは無理であるとの共通認識を持っているが、全部を変えようというのではない。つまり自閉症の特性に応じた指導時間を設定するのではなく、今ある中でやっていけ

ることを探することが重要。例えば、教育課程を編成するために、自閉症の特性を共通理解するための研修は必要で、当たり前のことを当たり前にやれていない現状を再認識して、そこから出発する必要がある。

(板書内容)

* 障害特性に応じた①集団活動、②集団や個別の指導の在り方 → 2本柱で考える (今回は①のみ)

* 障害に配慮する必要

- ・ 集団参加 (例: 体育や音楽) が難しい 他の障害の子とは違った指導が必要では?
- ・ 見通しがもちにくい

* 現在は…

- ・ 教育課程の枠に当てはめた指導内容・配慮・工夫 → 非常に難しい

自閉症の特性に応じた教育課程の編成

自閉症の子に応じた教科内容は何か? → 課題として考えなくてはならない事

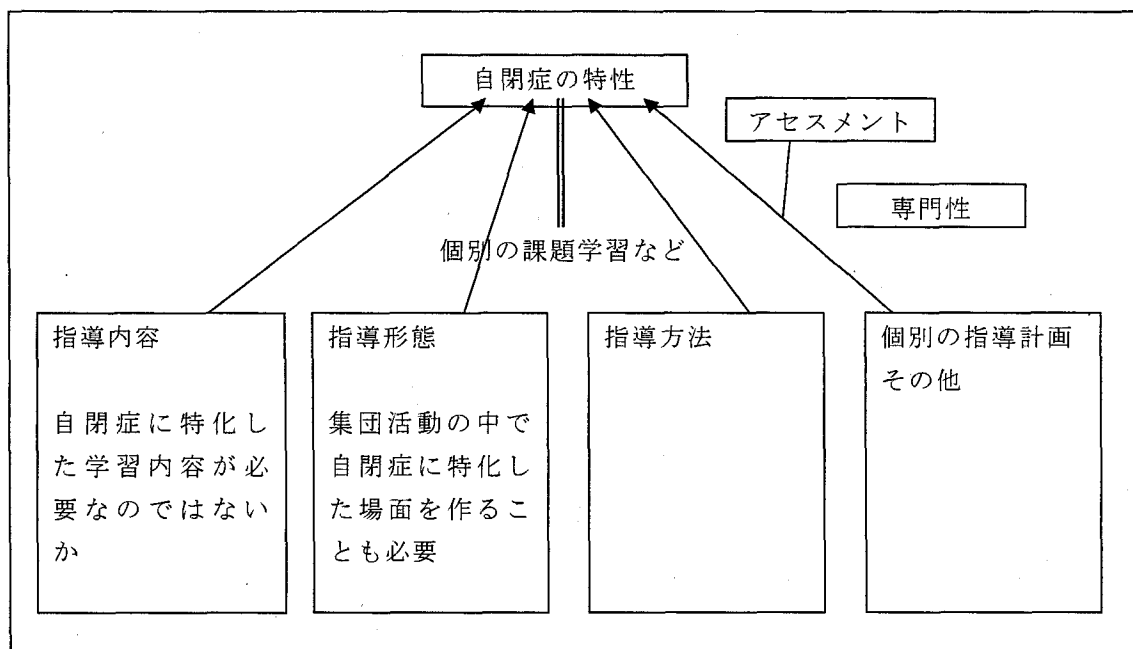
社会性 (人との関わり, ルール) の学び方

- ・ 特性に応じた指導が必要 → 取り出し指導 (分けた指導) でいいのか?
- ・ 集団の良さ → 周囲の人から認められ賞賛される場
- ・ 社会的自立をどう考えるか? → 自閉症者の自立観を考える → 将来自閉症に配慮された場は少ない。

(3) 福岡会場①

- ・ 様々な現状と課題が出てきており、例えば、自閉症に特化した学習内容が必要なのではないか、集団活動の中で自閉症に特化した場面を作ることも必要なのではないか等の意見があった。
- ・ 学校全体としてチームとして取り組む必要がある。自閉症を理解するチェックリストが必要で、すべての教師に浸透させる必要がある。
- ・ 新しい指導の形態を作ろうという意見がでた。個別の課題学習が有効なのではないかという意見が出てきた。自閉症の特性を理解すれば、あえて特設する必要もないのではないかという意見も出された。自立活動の中に盛り込んでいけば、わかりやすさは増すであろう。
- ・ みんなで取り組む際には、実践例を個別の指導計画の中に取り込んで子どもの変容を示していく必要がある。
- ・ 子どもの変容のためには教師の専門性の向上があり、それは子どものハッピーな生活につながっていくだろう。
- ・ ポイントを押さえていけば、どの場面でも特性に合わせた指導はできるはず。どちらがよいかは結論が出なかった。

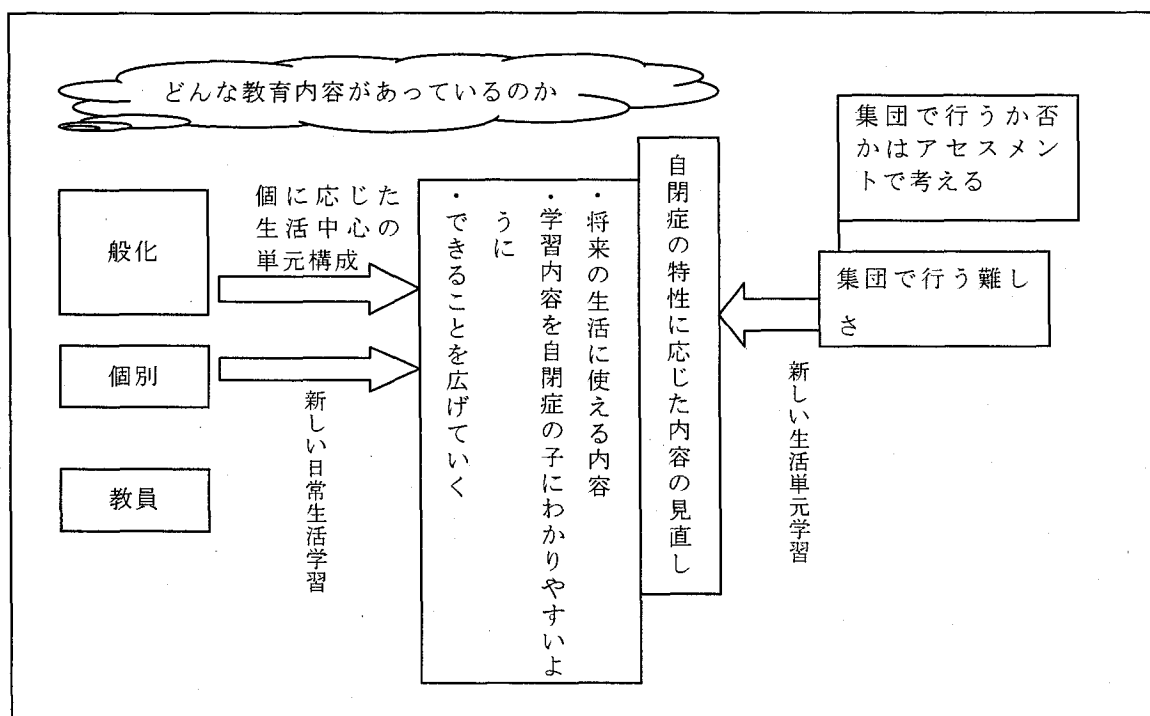
(板書内容)



(3) 福岡会場②

- ・どんな教育内容が合っているのかを考えたとき、自閉症の特性から考えて、集団で行う難しさなどがあり、現状として教育課程上位置づけるのが難しい。また、般化の難しさなどもある。
- ・今までの生活単元学習や日常生活学習の枠にとらわれず、個に応じた生活中心の単元構成をしていく必要がある。枠を大事にしたとしても、自閉症の特性に応じた内容の見直しをする必要がある。
- ・自閉症の特性に応じた内容を考える際、将来の生活に使える内容を取り上げたり、学習内容を自閉症の子にわかりやすいようにしたり、できることを広げていくよう工夫したり、保護者のニーズに合わせた学習内容を選択するなどが必要。

(板書内容)



5. プロジェクトワークショップのまとめ

ここでは、「自閉症教育実践セミナー」の各会場（北海道、大阪、福岡）で、プロジェクトワークショップにおける協議事項の共通点及び教育課程編成に関して特に重要であると考えられる観点を以下に整理する。

1) 総合的なアセスメントの構築に関する観点

- ・ 自閉症のある児童生徒一人一人の教育に、アセスメントを生かすことの重要性について学校全体で共通認識する必要がある。そのために、「校内システム」、「アセスメントを実施する力量」、「情報の共有」の三つの視点から改善・充実を図る必要がある。
- ・ これまでのアセスメントに加え、自閉症の特性を踏まえたアセスメント方法を検討する必要がある。そのためには、アセスメントの協働、結果の公開、計画的な研修システムの改善などが必要である。また、専門家と連携したアセスメントの実施も有効である。
- ・ アセスメントを教職員だけで行うのではなく、保護者と連携しながら実施し共有することで、個々の児童生徒の特性の理解が一層深まっていく。
- ・ 教職員が有する専門性を総合的に活用したアセスメントを行うことが大切であり、これをコーディネートできる人材が必要である。

各会場での協議では、自閉症のある児童生徒一人一人に関して、自閉症の特性に応じた指導目標、内容、方法を具体化するためには、校内においてアセスメントの意義や重要性を共通認識する必要性が指摘され、同時に特性を的確に把握するためのアセスメント方法を明確にする必要があることが協議された。

また、アセスメントを校内の教職員だけでなく、保護者をはじめとした関係者と一堂に会して実施することの意義についても協議された（ただし、本研究所と筑波大学附属久里浜養護学校で共同で実施した「評価のための個別セッション」の実践事例に触発された観点とも考えられる）。

このようなアセスメントの意義を各学校において共通理解し、教育課程の改善や個別の指導計画の作成、一人一人の特性に応じた指導の充実に結びつけるために、教師のアセスメントに関する力量、専門性の確保、向上が不可欠である点についても共通して指摘されており、校内研修の在り方や、アセスメントを効果的に活用するための校内システム、専門家との連携などが方途として挙げられた。

2) 目標設定のための観点

- ・ 学校として観点を定め共有するためには、自閉症の特性に関する共通理解が欠かせない。
- ・ 現状として、自閉症のある児童生徒の指導目標を設定するための観点は、学校または学部や学級で定めている取組はあまりみられず、教員個人での判断で行われている。
- ・ 自閉症の特性を踏まえた指導目標を具体化するためには、どのような観点が必要なのかについて検討する必要がある。そのためには、児童生徒の特性に応じた指導内容の整理が必要となる。
- ・ 観点の設定に当たっては、三つ組と言われる自閉症の特性を踏まえること、発達段階を把握することが必要であるが、DSM-IVやICD-10などの操作的定義からのとらえ方だけでなく、自閉症のある児童生徒の教育目標の観点から設定する必要もある。

共通して、自閉症の特性を踏まえた観点を定め指導目標を具体化する取組については、学校としての意識が希薄である点が確認された。現状としては、知的障害のある児童生徒の指導目標を設定する際の観点を参考にしていることや、個別の指導計画を作成する担当者の判断で指導目標を設定している状況などが挙げられた。

このような現状に対し、自閉症のある児童生徒の教育的ニーズを指導目標に反映させるための観点を検討する必要があることが確認された。

目標設定のための観点を学校として定めている実践例としては、筑波大学附属久里浜養護学校において、「生活を視野に入れたスキルの獲得」、「社会的行動を視野に入れた行動形成」、「認知発達を視野に入れた発達課題」の三つの観点を定めての取組があるが、これらの例を参考に、各学校において検討することが必要であると考えられる。

3) 自閉症の特性に応じた教育課程の編成の観点

- ・現状としては、知的障害の特性に対応した教育課程である。自閉症のある児童生徒等の特性に応じた配慮はしているものの、自閉症の特性に適した授業であるとは必ずしも言えない。現行の領域・教科を合わせた指導では、集団活動が多く、自閉症のある児童生徒にとって学習活動に参加しにくい状況がみられる。
- ・自閉症の特性に応じた指導内容を整理する必要がある。特に社会性や般化、認知特性等に対応する指導内容を具体化する必要があるのではないかな。
- ・個別の指導を行う時間をどのように確保するかが課題である。
- ・現行の教育課程においては、自閉症の特性への対応を徹底して行う視点、自立活動の時間における指導において個別的な指導を確保する視点、自閉症の特性に対応する内容を各教科や領域の内容と関連させて（または合わせて）指導を行う指導の形態を工夫する視点、などが考えられる。
- ・学習した内容の家庭生活への般化や、家庭と連携した指導など、家庭生活、地域生活への広がりを想定した教育課程改善の視点が必要である。

本グループでは、主に教育課程における目標、内容、方法の概念を自閉症の特性に応じてどのように整理し、各指導の形態において具体化していくのかという観点から、現状と課題、現状の中で考えられる方途について整理した。

現行の教育課程は当然のことながら、知的障害の障害特性に対応する内容（知的障害養護学校の各教科、自立活動の内容）を教科別の指導、領域別の指導、領域・教科を合わせた指導等において生活と関連づけながら指導を行うよう編成されており、個別の指導計画に基づいて具体化される個々の指導目標を達成するために個に応じた指導が行われている。各会場の協議においては、現状として自閉症の特性への対応について不十分であり、教育課程編成の改善や工夫が必要であることが確認された。

協議の中では、前述した点に加えて、教職員の共通理解やチーム・ティーチングの在り方、学級・学部経営の在り方、教育環境の整備、個別の指導計画の作成と活用などの様々な角度から課題が抽出されているが、特に、自閉症の特性に応じた指導内容の明確化、及び指導方法の工夫が中心的な課題として挙げられた。

教育課程改善の方途としては、先に整理したように①現行の教育課程の中で自閉症の特性に配慮した指導を徹底する、②自立活動の時間における指導を確保し、個別指導を充実させる、③自閉症

の特性に対応する自立活動の指導内容を、各教科や領域の内容と関連させて（または合わせて）指導する領域・教科を合わせた指導の形態を工夫する、の三つの視点が挙げられた。